

17 シャルトル (フランス)

街と大聖堂をつなぐしくみ



Chartres

●都市にそびえる大聖堂

シャルトルにはパリから近郊電車で1時間弱で着く。この街でゴシックの大聖堂を見ずにいることは不可能である。街のどこにいても、どんなにぼんやりしていても、巨大な大聖堂が目に入ってしまうからである。ゴシックの大聖堂の特徴は、まずその巨大さにある、と思う。街のほかの建物に比して、まったく異なった世界のもののように大きく、高く、そびえ立っている。それは人間の大きさを超えた、神のスケールとして街から浮き出し、街を支配している。実際、大聖堂の体積のなかに、それがつくられた中世のころの街のかなりの部分は、すっぽりと納まってしまわないだろうか。

ゴシックの大聖堂が建てられた場所は、決まって都市である。というよりも、都市的な活力と経済力をもった街だけがゴシックの大聖堂を実現させたというべきであろう。大聖堂は、その鐘の音によって都市の日常生活を定めていたばかりでなく、都市の運営を議論する集会や商取引の場ともなったという。そこは交流の場であり、戦乱時などには避難場所ともなった。聖堂があまりに日常生活と密接であったために、ペットの連れ込み禁止令や宴会禁止令が出されたりしたという¹⁾。

さらにシャルトルは876年に「聖母の衣」がもたらされて以来、それを聖遺物とする巡礼地であったから、堂内は巡礼者の休息所や病人の宿泊所と



図1 シャルトルの街と大聖堂西正面 大聖堂は街から浮き出している

もなったという。聖堂内部は入口から内陣に向かってゆるやかな上り勾配になっているが、これは巡礼者たちがここで宿泊した際に、水を流して洗い清めるためだったといわれている²⁾。

こうした使われ方を想い描いてみると、大聖堂の巨大さも理解できる。それは公共ホールであり、議場であり、おそらく裁判所であり、病院でさえあった施設なのである。使い方が生活に密着しているという意味ではほかの建物と同じなのだ。ただ1点、周囲の建物と異なっているのは公共性である。あの大きさは公共施設としての偉大なものだ。人間の大きさを超えた神のスケールと見えたのは、個人の大きさを超えた都市のスケールと言い換えることができそうである。

●「アエディクラのシステム」

ゴシックは12～13世紀の短期間に、フランス北部で集中的に実現した様式である³⁾。パリ北郊のサン・ドニにはじまり、パリ、シャルトル、ランス、アミアン、ブールジュなどに次々につくられた大聖堂は規模、意匠、構造がよく似ており、30～50年程度で全体ができあがっている。このことは統一した手法



で、システムティックに工事が進められ、またそのやり方が伝わっていったことを示している。

ゴシック大聖堂の建築の特徴としてリブ・ヴォールト、

図2 大聖堂交差部 下から大アーケード、トリフォルム、クリアストーリ、リブ・ヴォールトの順で大小の「アエディクラ」が現れる

*1 文献①p.21

*2 文献③p.58,60

*3 ゴシックというのは後の時代が付けた言い方で、13世紀ドイツの年代記では「フランス様式 Opus francigenum」という言い方がされている。(文献①p.21)

*4 こうした論法は19世紀にヴィオレ・ル・デュックによってなされて以来のものである。(文献①p.27, 文献②p.20)

*5 文献②pp.9-39

*6 神殿の内部に置かれる家型をした厨子のようなものや、2本の柱が破風(ペディメント)を支えてその中に彫像を納めている部分のユニットなどを指す。

尖頭アーチ、フライングバットレスが挙げられる。これらは構造的合理性から説明されることが多い*4。これに対して建築史家サマーソンは、ゴシック期の人々が尖頭アーチの繰り返しからなるデザインを望んだからあのようなものができたのだ、という見解を著している*5。

サマーソンによれば、ゴシック建築を読み解く鍵は「アエディクラ」にあるという。これは小さな祠を意味する語だが*6、彼はゴシックの尖頭アーチがつくる縦に細長いプロポーションをアエディクラとみなし、このプロポーションの拡大縮小からなっているゴシックの大聖堂を「アエディクラのシステム」だというのである。

確かに、ゴシックの大聖堂は入口からはじまり、身廊と側廊を分ける大アーケード、その上部のトリフォリウム、さらに上部の明かり取りであるクリアストーリー、そして身廊の天井をなす横断アーチ、リブ・ヴォールト、と大小さまざまな同形の「アエディクラ」の反復によって成り立っている。そしてステンドグラスの嵌められた窓という窓のほとんどすべてが、やはり同形の「アエディクラ」なのである。リブ・ヴォールトのリブは、構造のためよりも聖堂全体を「アエディクラ」に見せるための装飾であるとサマーソンは言う。このことはリブを下に辿って行って、壁やアーケードの柱を見ると理解が増す。それらは壁においては何ら力を受けていない繰り返し型であり、アーケードの柱



図3 左が大聖堂南ポルタイユ(ポーチ)、右がシャルトルの街

●参考文献

①飯田喜四郎, 黒江光彦他『世界美術大全集9 ゴシックI』小学館,1995

②ジョン・サマーソン, 鈴木博之訳『天上の館』鹿島出版会,1972

③『イル・ド・フランス ミシュラン・グリーンガイド』実業之日本社,1992

は、実は非常に太い柱を分節してリブを束ねたように表現したものなのだ。これらの装飾的なリブが地上から40mにもおよぶひと続きの線として巨大な「アエディクラ」を描き出しているのである。

●遠望と歓迎：都市の表現

「アエディクラのシステム」は、異なるスケールを相似形によってつなぐしくみである。これによって、入口周りに並んだ人間の背丈ほどの彫像のスケールから、その20倍のスケールまでを統御された造形として認知できるのである。

ここで都市的な観点から「アエディクラのシステム」を考えると、これこそが、大聖堂の超越的なスケールと、街の人間的なスケールとをつなぐものだということがわかる。入口周りに配された小さなスケールのアエディクラは、周囲の街の建物の窓や破風と呼応して、普通の建物へ入るかのように人を導く。一方、その細長いプロポーションに推されて上へ上へと、増殖し、拡大していく相似形を追っていくと、やがて街から浮き出すほどの高みへと至るのである。

遠くから見ると、街とは異なった世界のように見えた大聖堂は、近づくとき、人を迎え入れる表情をもっている。重要なのはこれが造形的に目と体を通して理解できることだろう。遠くからと、近くから、両方の視点に対応して、都市の公共施設たる表現となり得ているのである。



図4 大聖堂南側面 左に連続する控壁とフライングバットレス、右下がポルタイユ 上に向かって「アエディクラ」が拡大、増殖してゆく